【主題】指導と評価の一体化を目指した一試み

【副題】「単元評価」を生かした国語科の授業づくりを通して

【学校・団体名】宮城県石巻市立河北中学校
【役職名・氏名】教諭　成澤　夏子

１ はじめに

本校が期末考査を廃止してから５年が経過した。千代田区立麹町中学校での取組に依拠し、スモールステップでの評価を取り入れることにより、「これならばできる」「やればできる」という気持ちを喚起させ、主体的に学習に取り組む生徒の育成を目指して始まった取組である。期末考査を行わずに生徒の学習に対する取組を評価する本実践を、本校では「単元評価」と称している。

当初、麹町中学校の実践に倣い、期末考査の代わりに、単元テストを実施すれば良いのだという考えがほとんどだった。また、本校のような小規模校では、一人の教員が複数学年の授業を受け持つのが当たり前という実態の中、単元ごとに自作のテストを作成することは難しく、市販の教科書準拠テストを利用する教科が多く見られた。生徒に育成すべき資質・能力とのずれや、難易度の齟齬もあり、次第にそれでは不十分だと感じるようになった。更に、単元ごとにテストを実施することは授業時数の逼迫をもたらす。教科ごとに単元テストを行うことで、テストの回数が増え、精神的・時間的な負担を感じる生徒も出てくる。

「主体的な学習者を育成するための評価とは？」「生徒・教師双方にとって持続可能な評価とは？」職員間で何度も話し合いの場が持たれた。試行錯誤しながらも、教員一人一人が各々の教科の特性を踏まえた評価を追究した。各種学力調査の結果が振るわないと、「期末考査がないからだ」「期末考査を復活させるべきだ」という声も上がった。その度に頭を掠めたのが「期末考査があれば生徒は主体的に学び、学力は向上するのか」という疑問である。平成 28 年の中央教育審議会答申では、パフォーマンス評価などを取り入れ、ペーパーテストなどの結果にとどまらない、多面的・多角的な評価を行うことの重要性が述べられている。

今ある単元評価の中にこそ、生徒が主体的に課題解決に臨む鍵があるのではないか。単元評価を生かして、入試を突破する学力はもちろんのこと、社会に出ても活用できる汎用的な資質・能力を育成することができないか。本研究は５年間に亘り、単元評価を生かした授業づくりを推進してきた成果をまとめたものである。

２　研究仮説

国語科の授業において、本校独自の「単元評価」を生かし、３つの観点に応じ、図１の方法で学習評価を行うことで、指導と評価の一体化を図り、その単元で育成すべき資質・能力の定着を図ることができるだろう。

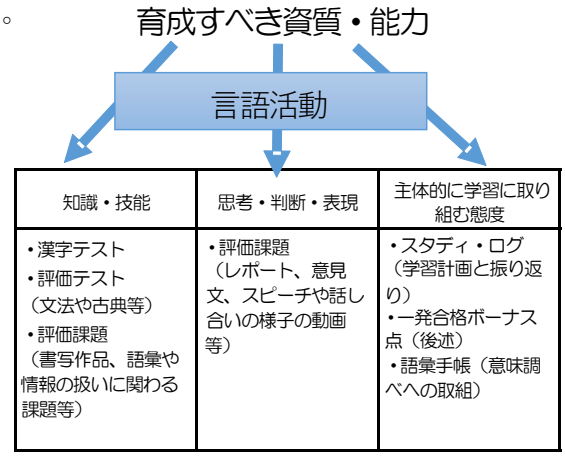


図１　単元評価の授業デザイン

３ 学びを支える土台　～単元成績表の活用～

本校では全ての教科において「単元成績表」を生徒に配付している。「通信表」では、各教科の観点ごとの評価がＡ・Ｂ・Ｃで示され、それをもとにした評定が数字で記載されるのみで評価の根拠が明記されない。その不備を解消するのが「単元成績表」である。その単元では、どのような評価材に取り組み、それぞれの評価がどうであったのかを示すとともに、個々の得点率をもとに評定を示している。本校では一つの単元の学習が終わると、教科担任が単元成績表を配付する際に、その単元で生徒が頑張った点や、課題となっている点を簡潔に伝えている。生徒は単元成績表を見ながら、自身の学習状況を把握し、自己調整を図っていく。

自己調整の手立ての一つとして、知識・技能の観点に関しては、再テストの受験を可としている。再度同じテストを受験し、前回よりも良い点数を取った場合は、その点数がその生徒の評価として認められる。この取組は知識・技能の確実な定着を狙いとした麹町中の実践を踏まえたものである。しかし、その一方で、

単元	題材	知識・技能				思考・判断・表現				主体的な態度				観点			評定
		評価項目	満点	得点	得点率	評価項目	満点	得点	得点率	評価項目	満点	得点	得点率	知技	思判表	態度	
7	「正しい」言葉は信じられるか	第26回河北漢検	10	10	73.3%	評価課題	3	2	75.0%	振り返り	3	3	64.9%	A	B	B	4
		＊	＊	＊		＊	＊	＊		ワーク	4	3					
		＊	＊	＊		＊	＊	＊		語彙手帳No.6	3	3					
		＊	＊	＊		＊	＊	＊		河北漢検一発合格	3	3					
	話合いで問題を検討しよう	＊	＊	＊		評価課題	3	2		スタディ・ログ	3	0					
	いきいきと描き出そう	＊	＊	＊		評価課題	3	3		スタディ・ログ	3	0					
	同音異義語	第27回河北漢検	10	4		＊	＊	＊		河北漢検一発合格	3	0					
		＊	＊	＊		＊	＊	＊		ワーク	4	3					
	わたしが一番きれいだったとき	＊	＊	＊		評価課題	3	2		ワーク	4	3					
	坊っちゃん	第28回河北漢検	10	8		＊	＊	＊		河北漢検一発合格	3	3					
		＊	＊	＊		＊	＊	＊		ワーク	4	3					
単元7 合計点			30	22			12	9			37	24					

▲図２　国語科の単元成績表

「どうせ再テストを受ければ良い」という安直な考えを生徒に抱かせてしまうという負の側面も考えられた。そこで、本校独自の取組として、初回のテストで合格点（その教科でＡと認められる基準となる点数）を取った際にのみ、「主体的に学習に取り組む態度」の観点にボーナスポイントを加算することとした。テストに向けて、既習事項を定着させるために自己調整したと捉えられるためである。

単元成績表を配付した直後、再テストを希望したり、未提出だった課題を提出したりする生徒は多い。自らの学びの成果を単元成績表によって視覚化することで、生徒たちは「何を」「どれくらい」「どのように」に頑張ればいいのか自覚していく。単元成績表の記述内容から、生徒は自身の課題を見付け、その克服のために何を努力すべきか把握する。

４　実践例

（1）　知識・技能の育成に向けた取組

漢字や文法、古典など、習得させたい知識が明確な場合、その評価として小テストを実施する。テストといっても、そのほとんどが 10 問程度、時間にして５分程度で実施可能な内容である。短時間で実施できる内容にしているのには、テスト回数が増えることにより授業進度の遅れが懸念されるからだけではない。この単元で生徒に確実に身に付けさせたいことは何か、授業者自身が吟味し、必要最低限に削ぎ落とした結果である。

故事成語の学習を例にあげると、単元評価を取り入れる以前は「資料集のこのページの中から出題する」と一度に広範囲の内容を提示していた。しかし、単に多くの知識を取り入れるだけでは、真の理解と知識の活用までには至らず、その場限りの知識で留まってしまう。何より多くの生徒が「こんなに覚えなくてはいけないのか」と意欲を失ってしまうという本校の実態があった。そこで、評価テストを行う際には以下の点を意識して行うこととした。

①生徒が「これならばできそう」という量となるよう、身に付けさせたい内容を吟味する。
（例）週に１回実施している漢字テストでは毎回出題範囲を 10～20 程度の新出漢字としている。
②闇雲に暗記させるのではなく、知識の活用を意識した課題設定を行う。
（例）故事成語を使った短文を３つ書きなさい。

上記の②のような場合は、あらかじめテストの内容を生徒に伝えている。生徒自身で選択ができる課題にすることで、生徒が数ある故事成語の中から、興味のある言葉を主体的に調べるようになる。また、「短文を書く」という課題を設定することで、知識の暗記に留まらず、意味を自分なりに咀嚼し、日常生活の場での活用へとつなげることができる。

（2）思考・判断・表現の育成に向けた取組

単元評価制度２年目から、国語科では市販の教科書準拠テストでの評価を止めた。その単元で生徒に身に付けさせたい資質・能力や問題の難易度が、指導者の意図したものと市販のテストの問題とではずれが生じることが最たる理由だ。また、本校では年２回の標準学力調査の他に、１年生は３回、２年生は４回、３年生は５回の校内実力テストを実施しており、入試対策としてのペーパーテストの機会は十分確保されている。そこで、新たに単元評価を生かした思考・判断・表現の評価方法について焦点を当て改善を試みた。

入試や実力テスト等では、「～について○字以内で説明しなさい」という問題がよく見られる。こういった問題への指導を、普段の授業の中でどの程度行えているだろうか。また、生徒が取り組んだ回答についても、その都度評価し、何が出来ていて、なぜ丸が付かないのか生徒が納得できる形でフィードバックすることが

できているだろうか。評価規準を明確に生徒に示すことなく指導も不十分なまま、期末考査でのみ評価していては生徒の力は伸び悩む。

そこで、思考・判断・表現の観点においては、単元ごとに設定した言語活動に基づく課題（評価課題）で生徒の学びの成果を見取ることとした。実施した１年目、生徒の表現力の向上には手応えを感じたが、実力テストの結果にはそれほど向上が見られなかった。

それを受けて、評価課題に入試や全国学力・学習状況調査等の各種学力調査で出題される問題を意識した「条件付け」を取り入れた。その「条件付け」が評価する際の規準となる。以下、評価課題の一例である。

> 「何のために『働く』のか」（東京書籍）での評価課題
>
> 次のグラフは、社会人１０００人を対象に行った働くことに関するアンケートの結果です。あなたがこのグラフから読み取ったことと、その読み取ったことに対するあなたの考えを１６０～２００字で書きなさい。
>
> （令和７年度宮城県公立高校入試の問題を参考にして出題）

さらに、評価規準を事前に生徒に示すことにより、その単元で育成すべき資質・能力をより効果的に身に付けさせることができるものと考えた。常に評価規準を明確に示すことで、生徒は自ずと「何を問われ」（課題把握）、「どのように回答しなくてはならないのか」（問いに対する的確なアウトプットの仕方）を意識することになる。そのための一つの手立てとして、評価課題のワークシートの末尾には必ず評価規準を明記している。

これにより、生徒は常に評価規準を意識して課題に取り組み、その規準をもとに自己評価を行う。しかし、下位層の生徒にとっては、自分がその規準を満たしているのかを判断することは難しい。そこで、授業では、級友と評価課題を相互評価し合う場面を意図的に設定した。更に、教師が評価を行う際、この評価規準を満たしていない部分に印をつけて返却する。「何が足りなくてＣだったのか」を示すことで、生徒は自身の課題を的確に把握し、次に生かすことにつながる。この積み重ねにより、生徒は実力テストや標準学力調査などの学力調査の場面でも、授業で身に付けたい資質・能力を発揮できるようになっていく。

評価規準

一　内容及び表現について
□グラフを正確に読み取り、そこから分かったことを具体的に記入しているか。
□グラフから読み取ったことに対して、自分の考えを具体的に述べているか。

二　表記について
□誤字や脱字はないか。
□仮名遣いや送り仮名は正しいか。
□漢字、ひらがな、カタカナの使い分けは適切であるか。
□句読点やその他の符号の使い方は適切であるか。
□原稿用紙の使い方は正しいか。

図３　ワークシートの末尾に明記した評価規準の例

（３）主体的に学習に取り組む態度の育成に向けた取組

「　話し合いで問題を検討しよう　～　私たちの意見書　～　」スタディ・ログ
【氏名　　】

単元のゴール			
「16歳未満のSNSの利用を禁止すべきか」というテーマについて話し合ったことをもとに意見書を書く。			
目指す学びの姿	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習する態度
	① 情報の様々な表し方（リンクマップ等）を理解し、使うことができる。	② 互いの立場や考えを尊重しながら話し合い、結論を導くために考えをまとめることができる。	③ 進んでメリット・デメリットを検討し、互いの立場や意見を尊重しながら話し合う。

■学習計画　／　学習記録

時	本時の学習	私の目標	振り返り
1	話合いのテーマと、話合いを進めるうえでのポイントを理解する。①		
2	情報を集め、メリット・デメリットを書き出し、リンクマップにまとめる。①・③		
3	リンクマップをもとに、メリット・デメリットを検討し、吟味する。②・③		
4	メリット・デメリットの重要性を比較し自分の立場を決める。②・③		
5	話合いの内容を踏まえて、自分の考えを意見書にまとめる。②		
6	意見書を互いに読み合い、根拠の妥当性を検討する。学習の振り返りを行う。②・③		

学習を振り返って
お互いの立場や意見を尊重して話し合う学習を通して、どんな力が身に付いたか、その力をこれからの学習や生活でどう生かしていきたかいをまとめよう。

図４　スタディ・ログ

スタディ・ログとは、単元における学習計画と振り返りを１枚のシートにまとめたものである。単元を通してのゴール（評価課題）を明記し、生徒自身がゴールに向けて、どのような力を身に付けなければならないのかを理解させ、見通しを持って学習に取り組むことをねらいとしている。また、毎時の授業での学びを記録・蓄積し、それらをもとに、単元末の振り返りを記入する。この取組を継続することにより、以下の効果があると考えた。

・単元を通しての自分の学びを言語化させることで、資質・能力の定着を図る。

・単元を通して身に付けさせたい資質・能力を、「どのような場面で」「どのように活用することができたか」を意識させることで、より深く、本質的な学びに到達させる。

昨年、２学年で「書くこと」を扱った単元（「根拠を吟味して書こう」東京書籍）の最後に振り返りの場を設定し、説得力のある根拠の条件について学んだことを書かせた。すると、「主観的な意見とならないよう、数値や資料などを示すと良い」「すぐに反論されないよう、反論を予想して、それに対する反論も考えることが重要である」という記述が見られた。その後の「話すこと・聞くこと」を扱った単元（「説得力のある提案をしよう」東京書籍）の中で、「説得力のある話の構成にするためにはどのような工夫をすべきか」という発問をしたところ、前の単元での学びを生かした回答が多く見られた。このことから、単元ごとの学びをその場限りのものとせず、生徒が次の学びにつなげようとしている様子がうかがえた。

【生徒の振り返りの記述内容から】

話を聞くとき、話し手の立場に立って考えたり、自分の知識や経験から話の展開を予測したりすることができると分かりました。また、評価する際は主張と根拠を結び付けているかや、どのような表現の工夫がされているかに注目すると良いと学びました。これから友達と話すときや、発表を聞く際に、相手の立場に立って話の展開を予測していきたいです。　　「提案や主張の聞き方」東京書籍

５　成果と課題

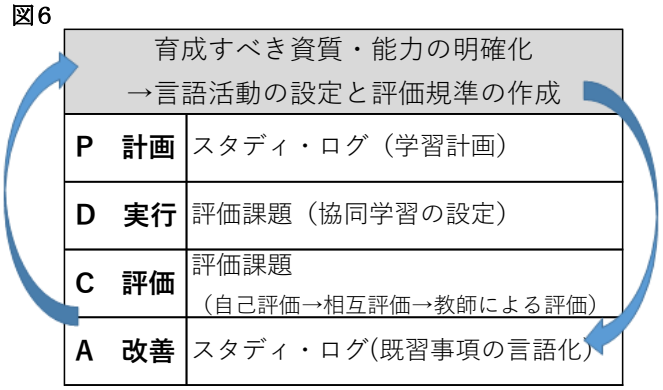
図５　標準学力調査正答率の推移

標準学力調査の正答率（令和７年度３学年　国語）					
実施時期	R5.4	R5.12	R6.4	R6.12	R7.4
本校	56.2	61.5	66.5	61.0	62.8
全国 （本校との差異）	59.2 （－３）	62.0 （－0.5）	65.1 （＋1.4）	58.0 （＋３）	61.3 （＋1.5）
市内 （本校との差異）	56.0 （＋0.2）	56.8 （＋4.7）	63.8 （＋2.7）	55.6 （＋5.4）	56.5 （＋6.3）

本校３学年の標準学力調査（国語）の結果は図５の通りである。令和５年度１年次の国語の達成率（評定３以上の生徒の割合）が 55.6 だったのに対し、今年４月に実施した３学年国語の達成率は 71.7 と全国平均（61.3）を上回った。達成率の向上から、特に下位層の生徒の力を底上げすることができたと言える。さらに、今年度行われた全国学力・学習状況調査では、本校３学年の国語の学校正答率は全国平均を上回った。これらの結果をふまえると、「単元評価」を通してその力を伸ばすことができたと言える。

「単元評価」を通して、教師はその単元で育成すべき資質・能力をこれまで以上に明確に意識することができた。そして、それは評価規準として、生徒とも共有すべきものであることを確信した。図６のように一番先にその単元で育成すべき資質・能力を精査し、評価規準を生徒へ明示にすることが重要となる。授業者はそこから逆算して、手立てを講じていく。

図6



５年間の実践を通して明らかになったのは以下の点である。

① 単元全体を見通し、育成すべき資質・能力を授業者が明確にした上で授業づくりを行うことの有効性。

② 単元成績表や評価課題の評価規準の明示により、従前では不透明だった評価の「見える化」の必要性。

これらを他教科とも共有し、教科の特性に応じた「評価課題」や評価規準の設定の仕方について現在学校全体で模索中である。今後も単元評価を切り口に、学年・教科間で課題を共有し、本校のカリキュラム・マネジメントの方向性を定め、指導と評価の一体化を図った更なる実践を積み重ねていきたい。

参考資料

工藤勇一 2019「麹町中学校の型破り校長　非常識な教え」（SB 新書）

国立教育政策研究所 2020「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料　中学校　国語

文部科学省 2016「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（中教審第 197 号）（東洋館出版社）